

三、福田国太郎は一〇〇、山川均は一九二、山川の盟友
守田有秋は二五五、同じく浜田仁左衛門は二四四、相坂

信は四一五、山鹿泰治は九〇四である。(エスベラント
運動史研究会会員) 第三表紙(つづく)

岩佐作太郎の擁護

— 3 —

布留川

信

岩佐の山賊論は、あまりよい表現ではなかったといわれます。それでは、もっと衝撃度の弱い表現であつたらどうかということも一応考えられますが、それは決して岩佐の容認するところではなかったでありましょう。なぜなら、岩佐としては、現実の労働運動は、いかにも花々しく戦闘的で、革命的に見えるかもしれないが、実は、それは錯覚であり、その本質は資本主義と何ら異なるところのないものであり、あるがままの労働運動では、決して革命運動にはなり得ないという事実を深く印象づけることが当時の岩佐の目的であつたからだと思います。したがってショックが、大きければ大きいほど、効果的でよいというのが狙いであつたのではないだろうか。ところが、ショックはショックでも、そのショックはおそらく岩佐の予想もしなかつた意味のショックであつたのであります。

岩佐の予期したショックとしては、その結果として、

そこに必然的に起る労働運動に対する一層深い反省と、全く新しい自覚による心構えを、人間に対する信頼感をこめて期待したのであります。その心構えとは、狭義にはわれわれ自身の労働運動に対する心構えのことですが、広義には資本主義そのものに対して否定の倫理を身につけることであります。

岩佐の期待した以上のような意味で、山賊論が理解されるためのものであつたとすれば、山賊の表現は非常に効果的であり、また人間心理を捉えた、それこそ、ほんとうの社会科学的論理ともいうべきものであつたのであります。ところが、マルクス主義に毒されたサンジカリストは、岩佐の否定の論理にだけ心を奪われて、その後にある岩佐自身の否定の論理に同感できず「理論が否定であるから行動も否定である」と独断して、岩佐が労働運動を否定したと非難するのであります。岩佐の予期に反して、かれらの受けたショックは内に向かって反省

とならず、外に向かって岩佐攻撃という拒絶反応を起したのであります。これは、もちろんサンジカリストが

否定の倫理を身につけていなかったからであります。岩佐の否定の論理は、労働運動に対する心構えに関する問題であつて、労働運動をするかしないかの問題ではありません。それが、岩佐の予期に反して後者の問題とすりかえられて日本のアナキズム運動史の上に、否定論として永久に残されることになっていたのであります。したがって労働運動衰退の原因も責任も一切が後者の問題と関係されているのであります。

以上のように、山賊論はアナキズム革命という立派な人間的目的をもって、その第一歩をして誤りなからしめんがために老アナキスト岩佐が実践的立場から書かれたもので、決してサンジカリストが言いふらすような否定のための否定ではありません。むしろ否定の倫理を身につけて労働運動を積極的にせよといっているのです。否定されたのは理論的にも倫理的にも、名実ともに資本主義肯定の上に立つ労働運動であります。だまっています革命はくるといふマルクスに對し、だまっていますは、ほんとうの革命はこないといふことをアナキスト岩佐が言っているのです。したがって山賊論は、否定の倫理を身につけて実践的立場に立つて読む人間であつてこそ、正

しく理解されるものであります。

ところが、これを読む人間が理論第一主義で、実践的立場に立つことを忘れ、資本主義の道徳から脱却することのできなかつた人たちがあつたために、自分たち自身のモラルとしての反省もせず、逆に労働運動否定論として曲解したのであります。ここに理論に囚われた人間の不自然さと非人間性があるのであります。これがブルジョア文化に毒された人間であるという何よりの証拠であります。

要するに、岩佐は山賊論をもって労働運動をするなど否定したのではなく、むしろ労働運動はしなければならぬものとしての前提に立つて、否定の倫理を身につけなければならぬということを期待をこめていたのであります。ところが、かれらが、この否定の倫理を身につけていなかったために山賊論によって労働運動が否定されたものとして岩佐を非難するのであります。

日本のアナキズム労働運動の衰退は岩佐の責任であるとかサンジカリストに非難された山賊論も、あえてわれわれとはいわず、いやしくも労働運動に関心を有するほどの人間ならば、何んの抵抗感もなく、至極当然のこととして読まれるにもかかわらず、ひとりサンジカリストだけが、拒絶反応を示したという心理は、とりもなお

さず、実践的立場に立つて岩佐の真意を読みとろうとしなかったという後ろ向き逃避の心理の現われであると断定せざるを得ません。山賊論に対する彼らの態度そのものこそ、もはや山賊論以前からのものとして隠すことのできない、彼ら自身の逃避的な内面的事実を証明するものであります。ここに、すでに日本のアナキズム労働運動の衰退の徴候が胚胎していたのであります。

さらに、このような徴候を一層一般的に拡大、促進のための主役を果たしたのは、だれであろう山賊論を労働運動否定論として日本全国に宣伝し、また歴史の上に書いたサンジカリスト自身であります。そしてその衰退の責任が、すべて今は亡き岩佐一人に負わせられたのであります。私に言わせれば、山賊論が運動を衰退させたのではなく、むしろ彼らの逃避的心理が山賊論を利用して、その促進助長をして衰退を招き、今日に至った根本原因であります。これがほんとうの歴史的事実であります。すべて因果関係は彼らの書いた歴史とは全然逆であります。岩佐の労働運動の否定論とその責任は、そのままかれらサンジカリストに返すべきものであります。こういうふうな内面的事情がハッキリしてくると、そこには、なんだかサンジカリストが自分たちの非を隠すためにアナキストを誹謗し、あるいは岩佐の思想を葬るための策

謀があったのではなかったかとさえ疑われてきます。なぜなら、そこには昔ながらのボルの常套手段そのままの陰謀の臭みがあるかのように感じられるからであります。日本のアナキズム運動史に欠くことのできない、最も活動的であり最も話題の多かった岩佐に関することが、全然歴史の上から抹殺されているのは何故であろうかと疑わざるを得ません。華々しい話題の多かった大杉に比して、逸話の多い岩佐について語る積極的努力にこそ、歴史に関して筆をとるものの使命ではないだろうか。とにかく、以上に述べたような逃避の傾向が当時、一般的空気であったか、どうかはわかりませんが、一つには岩佐さんだけにその責任を負わせようとするのは、岩佐さんが山賊論そのものにも示されているように、非常に正直すぎるほど率直な性格の人間で、少しもお世辞らしい口をきかないで、ずけずけものをいうことから、人に反感を持たれていることなどは、隠れた原因の一つに数えることができると思います。しかし、岩佐さんの最もきらい率直さを欠いた不正直な人間や、お世辞を喜ぶような奴隷的人間の責任まで一緒に負わせられたら岩佐さんも成仏できないだろう。

かれらが得々として書いた歴史に対して、このような見方は申し上げたくはありませんが、労働運動衰退の原

因が歴史の至るところに、一方的にアナキストや岩佐さんだけの責任であって、サンジカリストには何んら責任がなかったかのようなことばかり歴史的事実として書くならば、連帯責任を感じる私としても真のアナキズム発展のために、こうした反対意見のあることも一言せざるを得ないと思います。これも私に許されたる自由だと思えます。もっとも、かれらの書いた歴史なるものは山賊論だけのことでありません。一事が万事です。正しいことは逐次おのずから明らかにされるであります。ここに岩佐さんの性格を物語る一つの挿話を入れることにしよう。それは第一次大戦直後のことでした。労働争議がいたるところに勃発した当時、労働問題講演会や労働争議応援演説会が各所に催されたが、その演説会の最後をしめくくる弁士が、いつも岩佐であったことは古い同志はだれでもよく知っていることであります。多く

の弁士によって資本主義の不正不義と貪婪飽くなき資本家の横暴を完膚なきまでに説き尽された最後に、万雷の拍手によって登壇した岩佐が、上総弁丸出しの、しかも熱のこもった雄弁をもって語り出すところのものは、前弁士によって述べられたことを全然否定するかのごとく、資本の横暴を当然のこととして全弁士によって説かれたすべてを否定する論理でありました。それはあたかも、その日の演説会そのものを否定するかのようにでありました。それでも岩佐の論理に静かに聞き入る聴衆は、やがて、われに返ったかのように、岩佐の降壇に再び一層熱のこもった拍手を送って演説会の最後を飾るのであります。これが岩佐の山賊論に示された否定の論理と同一のものであり、また、いわゆる「演説会もらい」といわれるものであります。

ゲリラとアナキスト

これは「アルゼンチンの隔月刊アナキスト誌」レコンストルイル」第80号、一九七二年九・十月号からの訳である。シカゴの黒十字に英訳されたものから

オーグスチン・スーシー

重訳した。黒十字については野火欄参照。(三浦)

著者の略譜 — オーグスチン・スーシーは現在八十才

をこえている。彼はその全生涯をドイツ、スエデン、スペインおよびラテン・アメリカにおよるアナキズムのプロパガンダと闘争に捧げた。彼はその最初から、そして長年ドイツ・アナルコサンジカリスト労働運動に活躍し、そして多年の間、その機関紙「デア・シンジカリスト」を編集した。彼は一九一九年の「労働組合赤色インダナショナル」のモスクワ大会へのアナルコサンジカリスト代表の一人であつたし、ポリシェヴィキ独裁の真実を暴露した最初の報告の一つを発表している。ヒットラーの弾圧でドイツからスペインに脱出してスペイン革命で活動的役割を果たした。スペインにおけるリベルテール共同体についての彼の最初の報告や著作は欠くことのできない歴史的資料である。彼は今ミュンヘンに住んでいて回顧録を書いている。(彼は僕たちの「リベルテール」を知って毎月送れと言つて来た。最近来た「ツァイト・ガイスト」誌に、彼は「ルドルフ・ロッカー、一八七三—一九五八」を書いてゐる。何とかしてこれをリベルテールに訳載したいと思つてゐる。

彼の名をオーグスチン・スーシーと書いたが Augustin Soucy をドイツ読みでどう書くべきか分らなかったからである。いざれ正しい読み方に近づけたカナ文字標記にしたい。(三浦付記)

×
ドイツの新聞がバーデル・マインホフのテロ事件を「アナキストの犯罪」というレッテルをはりつけたとき、ハンブルグの古いアナキスト・グループは次の声明を発表した。

「ウルリケ・マインホフ(彼女はハンブルグに住んでいた)はわれわれのグループのメンバーではなく、われわれの集会のどれにも出席したことはなかった。新聞が間違つて『ネオ・アナキスト』とレッテルをはりつけた人々は、決してアナキストの活動に関係はない。ドイツのアナキストたちは『都市ゲリラ』やツバマロス(意味不明)のテロリズムを否認し、拒否する。反権力主義社会主義者は、その基礎を人道的原則の上においており、犯罪やテロリズムに反対する。・・・」。

若いアナキストたちの新しいグループはヒットラー以前の古い世代の老アナキストたちとの接触が無かつたとしても、それでもこの声明を裏書きしている。アナキストの新旧両世代共に、みづから毛沢東主義、ネオ・スターリン主義者と繰返して主張して、アナキスト

であることを強く拒否してゐるバーデル・マインホフ・

グループの目的または戦術には、何の責任もなければ、何一つ共感するものではないことを主張している。

一九六八年五月のバリ学生の大反乱で、サンフランシスコからストックホルムに來た学生たちは、ますますアナキストチックになつた。アナキズムの思想はまた、『科学的社會主義』の堡壘であるドイツの諸大学にも浸透した。マルクス主義の母国ドイツにリベルテールの理論を導入することは困難なことだ。

ゴッドウィン、ブルードン、そしてクロボトキンおよびその他のアナキスト理論家たちの思想は、ドイツの学生たちの知的水準から、あまりにも遠く隔たったものだった。それらは偉大な十九世紀革命家ミハエル・バクニンの革命的業績に鼓舞されたものであつて、正統マルクス主義と混り合い、組み合つた彼の思想によつて鼓舞されたのではない。こうした折衷の新予言者たちは、オランダヘアントン・パネコクやゴルテルたちのような共産主義者会議、ドイツ人共産主義者オットー・ルーレやカール・コルシュ、そしてネオ・マルクス主義評論家ヘルベルト・マルクーゼやアドルノ、それから『マルクス主義リベルテール』のマルクス・ブルバシエやダニエル・ゲランなどである。こうして社会主義理論の新変種

『アナルコ・マルクス主義』がドイツに導入された。

この新しい傾向は、『八八三』という変わったタイトルで、ベルリンのネオ・アナキストの機関紙に反響している。この機関紙の幾つかの号はバクニンとマルクスの写真を一緒にした口絵を入れている。古いチュービンゲン市のネオ・アナキスト・グループは、フアナル紙(ヒットラーの手先に暗殺された殉道者アナキスト詩人エリッヒ・ミューザムによつて創刊された紙名)を発行している。ワイスバーデンの学生は「リベルテール戦線」を出し、ゲッティングでは「ポリチコン」、ザイゲンではネオ・アナキスト学生が「ル・リベルテール」というフランス語のタイトルのものを出している。ハンブルグの古いドイツ・アナキストたちは、その機関誌「ノイエス・ビギネン(新しい開始)」を「ツァイトガイスト(時代精神)」に変えた。ミュルハイム・ルールで出している古い「ペフライウンク(解放)」はネオ・アナキストの機関紙になつた。・・・

当然考えられるように、若いアナキストのプロパガンダは、全体として古いアナキストの戦術とは異つてゐる。半世紀にわたつてアナキストの反軍国主義を象徴した壊れたライフル銃の代りに、新しいアナキストのシンボルはピストルと火焰びん(モロトフ・カクテル)

である。マインツのアナキスト・グループはバリの学生反乱に『新しい時代の開始』を見た。このグループの機関紙「直接行動」は次のように宣言する。

『近代資本主義は弱体化している。そして非中央集権的戦闘ゲリラ集団、逃走用にハイジャックした航空機、その他の同様な戦術によって粉砕できる。警察がこうした集団を逮捕し、鎮圧することができる機会はほとんど皆無である。・・・まして高度に集権化された地下組織よりも弱体ではないとは言えない。・・・』

だがこうした大げさな発言は、まじめに受取るべきではあるまい。事実、マインツ・グループはバーデル・マインホフ・グループの異様なテロリストを手本にもしなかったし、それに参加もしなかった。

一九七一年一月にハノヴァーの学生たちは『ドイツ・マルクシスト・アナキスト学生同盟』として署名された『左翼プロレタリア原則宣言』を発表した。

『弁証法的マルクス主義は革命的態度によって適用されねばならない。アナキズムは、社会主義的傾向として、国家、人による人の抑圧の廃止と、抑圧のない

自由社会の創造を意味する。・・・』。

と宣言している。

ブントシヨウ（十六世紀の英雄的ドイツ農民を指すロマンティックな名称）グループはマルクス主義者の傾斜していると自称しているのだが、その宣言は次のように言っている。

『われわれは権力を握りたいとは思わない。われわれは「革命政府」をつくらうとは思えない。現存の抑圧機構と同じような抑圧機構を再建するだけのために、現在のものを廃止しようとすることは間違っている。

われわれは「指導者になろうとは思わない。そしてわれわれは「前衛」を自任することを排斥する。われわれはあらゆる形のドグマとスターリニズムを排斥する。われわれはマフノ、クロンシュタットの水兵、それからスペインのアナルコ・サンジカリストの理念の継承者である。・・・』。

長い間、ゲリラ問題に関心を持っていたベルリンのネオ・アナキストは、結局、そして決定的に、そうした戦術を排斥するにいった。『八八三』の機関誌の一論

文はバーデル・マインホフ・グループの『赤色分子』を

『スーバー・スターリニスト』として弾劾している。ベルリン・グループは全面的に暴力を排斥するのではないが、銀行に対し爆弾投げこみ、匿名グループによるテロおよび類似の戦術を、全面的に効果のない、そして反生産的として強く反対する。それは、社会の解放は、彼等の戦術を強く憎んでいる大衆の手とどかない、完全に孤立した、一握りのうぬぼれた都市ゲリラによって遂行できるなどといった、自称指導者の傲慢な推測を、決定的に排している。

清水君の手紙

―清水君に支援を！―

はいけい

一三日やっと移鑑になりました。橘君、大島さんからパンフとどきました。クロの「し思い出」にはとても力づけられました。それから救助の人から「アナキ」11号入りました。大島さんのことは時々週刊誌で見かけますが、他の諸君が支援してないのは残念ですね。ともあれ大島さんも元氣そうで何よりです。そちらは特に変わりはないと思いますが、様子を知らせて下さい。私は

ドイツのアナキスト青年運動は今、その思想を明確化する過程にある。それは『生産点における労働者の共同の経済的活動』を支持し、あらゆる形式の独裁に反対し、自由による進歩と、平和に対して献身している。

英訳註、バーデル・マインホフの『赤軍分子』が政府の政治権力を強化し、政府に、四百人の居住者に対して一人の警察官になるように警察を増強し、市民の自由を制限する新しい法律を施行する必要があるという口実を与えたとスーシーは指摘している。

相変らず元氣ですが、留置場に長いこといたものですか、運動不足と栄養過多で一〇磅以上もふとってしまつて、毎朝ズボンをはくのがひと苦労です。Gパンなどは、ボタンが全部かからないしまつです。もう少しで初公判です。判決が何年になるか分りませんが、おそらく函館に行くことになると思います。しかし、何年入れられようと、全ての同志諸君と共に、権力と対決していく意志に变りはないことを、明確にしておきたいと思っています。

毛沢東でさえこういつています。「斗争、失敗、再び失敗、再び斗争、最後に勝利、これが人民の論理である」。

四・一八

清水修一

同志諸君へ

附記

この手紙は、札幌拘留所にいる清水君からのものです。清水君の事件に関しては、大部分の同志が断片的にしか知らないと思いますので、簡単な事件の経過を述べておきます。七一年九月九日に、北海道庁赤レンガ庁舎で時限爆弾を爆発させたということで、去年の一月二二日に清水君他二名が東京と札幌で逮捕され、さらに二六日も一人が逮捕されると同時に、リベルテール関係者他一七ヶ所が家宅搜索され、今年に入って、二月一日に多摩美大の裏山から、清水君が埋めておいたという手製爆弾五個が発見された、というのが清水君の事件の内容です。この結果、手紙にもあるように清水君は起訴中で、四月二三日にその初公判がありました。おそらく、かなり早い時期から清水君達と分っていたもようであり、その間清水君を泳がせながら、この時期に逮捕に踏み切ったのは、年末にあたって公安のアナ関係と道警が手柄の一つ

も立てておこうということだったと思います。

清水君の事件は、さまざまな波紋を投げかけたし、我々もそれらの総括をしなければならない時が来たと思う。ここでは、僕なりに重要だと考えたことについて、付け加えておきます。

第一は、清水君の事件が、暴力というものを我々に突きつけたということ。行動の基底となった清水君の理論展開は、都市ゲリラ的な爆弾斗争を通じて総蜂起をかちとるため、まず自分達が北海道地区における爆弾斗争の火つけ役になる、といったものだった。あきらかに、そこには赤軍の「前段階武装蜂起」論に端的に見られる、この数年間の一つの傾向の影響が現われている。この清水君の行動に対して、リベルテール関係者内部では否定的な見方をする者が多く、その意見は正しいと思うのだが、ただ、清水君の行動を、爆弾ゲリラ斗争から総蜂起という路線の情勢判断の甘さからのみ批判するといふ、情況論だけの切り捨ては間違っているのではない。問題は、情勢が明確にもかかわらず、何故、清水君が爆弾斗争に走ったかということであり、そこでは、現在の左翼暴力の質と、それに対する我々の思想性が問われているのだ。

第二は、清水君に対する我々の影響力が問題となる。

清水君がリベルテールと関係するなかで、その考えを変えていったことは、「都市ゲリラ―総蜂起」論を捨てて、「今すぐ総蜂起はありえない。ただ、その時のために今から武器を集めておかねばならない」という立場から、爆弾を多摩美の裏山に埋めたということと分る。そして、その変化は単に情勢判断の変更というよりは、もっと本質的な清水君自身の変化だと、我々はかなり明確に言い切れるのではない。もし、清水君が事件を起す前に我々と関係していたら、清水君の行動を止めることができたかもしれない。とにかく、それは我々の力であり、そして我々にそのような力があるとするなら、この我々の力をより深く追求し、日常的な活動を通じて、できる限りその力を広範囲に及ぼし、第二の清水君のような無駄な犠牲を防止しなければならぬだろう。では、我々の力とは、清水君の事件以後、リベルテールの表紙の裏にのせられるようになった宣言にあるような非暴力性だろうか、それとも、別の何かだったのだろうか。

手紙にもありますように、数ヶ月にわたる獄中生活にもかかわらず、清水君の斗争意志は変わっていません。ただ、これから予想される数年にわたる獄中という外界と

隔絶された場における闘いには、想像を絶する困難さがないと思います。清水君がその闘い抜くためには、我々同志の持続的な支援活動が必要です。そのためにも、まだまだ微弱な日本のアナキスト全体が連帯して、清水君を支援する必要があります。ぜひとも、総てのアナキスト同志による清水君支援を、

(文責・西塔)

×

清水修一君からの第二信

・・・リベルテールの皆さんには、日ごろ面倒ばかりおかけしたにもかかわらず、今回は重大なご迷惑をおかけして、申しわけなく思っています。・・・リベルテールの会に対する権力の介入を許したことを深く自己批判したいと思います。今回の件は私自身の未熟と思いがりの結果でしたが、三浦さんらと交わるようになってから、私はいくらか成長したように思いますし、以前のアナコ・マルキスト的な部分も改善されたように思います。何よりもアナキズムそのものを深く知ることが出来ましたし、私の思想性そのものが大いに変革されたように思います。一昨年の九月の時点の私は全くちがう人間のように思います。今まで、といっても、たった二十になっただけですが、これほど自分自身が変わったことはなかったように思います。私はまだまだ未熟で、自ら

アナキストと称することさえはすかしいのですが、今後ともよろしくおねがいします。批判と助言を。奥さんやリベルテールのみなさんによろしく。札幌市東区東苗穂町四八四ノ一札幌拘留所内

右は私信だが、清水君は一昨年九月北海道庁爆破事件後上京、多摩美大に入り、リベルテールの会に来るようになった。温和で、リベルテールを真剣に助けてくれた。爆破事件で昨年十二月に捕えられ、リベルテール関係者十数名が自宅搜索を受けた。そのことを清水君は「権力の介入を許した」と言っているのである。しかし僕たちは僕たち自身の思想自体が権力者によって存在を問題にされねばならないことを知っているから、いつで

野 火

苦戦報告 大島英三郎

●四月十五日六名の同志は雨中を古田大次郎の墓参いいたしました。初恋も生命もなげすめて天皇制国家権力に肉弾として突撃し、中道にして絞首台に上った古田君の墓碑に同志の乙女の黄菊の献花は小雨の中に涙し、童貞で死去した古田君の霊は微笑したでしょう。私はこの美少女の誠意こそ、われらの運動の新しい出发点となること

も覚悟している。それで清水君から迷惑かけられたとも思っていない、清水君にも知らせていない。清水君がどうしてそれを知ったのか不思議に思う位だ。僕たちはいたずらに徒党を組んだり、ゲバったりすることが革命的だとは思わない。そんなことで行なう革命は権力革命ではない。僕等は思想をより深く学びたいと思う。

全国の同志たちが、どうか清水君を激励してくれるようにお願いしたい。公判の結果で短くて済めば良いが長くても、清水君を皆で守って行きたいと思う。僕たちは救援組織を持っていないが、同志たちの中にはそれを造りたいと言っている者もある。いずれにせよ僕たちにできるだけのことはしたい。(三浦)

を確信いたしました。

●五月一日メーデー東京会場にひるがえる新しい黒旗の下に同志六名はバンフをならべて販売しました。自発的購読者かなりあり自由の種は蒔かれたのです。

●資本主義体制下に良心的アナキストは金銭的に窮迫し食うに迫られ右集会に参加できぬ士も多いのです。アナキズム運動は多様性です。十人十色です。多数同志の健

康を私は祈るのみです。

●四月二十九日、天皇家が無恥の痴態をばくろする日、わが金子文さんの慰霊の集いが文さんの生家で営まれ、老若のアナキストが参加しました。私は文さんの手記十部を霊前にそなえ黒色バンフも全会衆に配布いたしました。会衆六〇名、文さんの思想と行動と愛に感激を新たにしました。当夜は老同志宅に温くむかえられた私どもは教えられること多く、クロの農業論の人口がふえ耕地が少くなればなるほど生産力は増し食糧はあり余り万人の裕福すぎる生活は可能だとの説の正当性を、その老同志の奥さんのお口から実証されたのです。

●五月下旬には大杉栄主幹の無政府主義戦闘新聞「労働運動」が第一次と第四次までの完全複製版刊行します。古川時雄、河本乾次、杉藤二郎、三浦精一さんらの序文大沢正道さんの解説を付してです。予価五千円を四千元で刊行します。

この文献は日本社会史に不可欠の記録でまた日本無政府主義運動の基本の血と涙をもって革命えの活動を私たちに要求し、戦闘を鼓舞するのです。

この新聞は近藤憲二さんの編集名義人で七年にわたり発行をつづけてきたのですが、最近商業出版社が私どもの刊行を知りながら同じものを刊行しカネもつけせんとし

ているのを聞きますが盗文の賊でしょう。私は前記各位、その他の無名の同志のご助力によって刊行します。なお昭和二年一月から十月までの第五次「労働運動」は雑誌がないので後日刊行し、序文をいただくべくしてもらえなかった老同志のを拝受したく念願いたします。

右悪戦苦闘をお知らせまで。

×

金子ふみ子の塔婆

四月二十八日の夜、二人の若い同志の好意で、小松隆二君とともに甲府に向った。着いたのは一時頃だったが、小松君からの話で一瀬さんが手配して下さった旅館に泊した。望月百合子さんや遠藤君の尽力で建てられた幸徳秋水の同志宮下太吉の碑を訪うた。建ってから間もなく誰れかにセメントを塗られて碑面の文字「我にはいつにても起つことを得る準備あり」の石川啄木の一句もハッキリと浮き出している。一個の石に過ぎない墓碑までも受難なしではすまないのだ。無政府主義者は常にその存在を問われねばならない。

塩山に行つて金子ふみ子の実家にいたときには、すでに多くの人たちが集っていた。仏壇の前に小さな「金子ふみ子霊位」という位牌が目立つ。瀬戸内晴美さんは、自分の郷里の家でつくってもらったのだが、ふみ子さん

もその本家に帰るにしても、言わば居候なのだから、他の御先祖よりも大きいのではと小さく註文したと話していた。読経、焼香と型の如く済んで、墓地に卒塔婆を建てた。正面に美しい富士山が見える。

中村高一弁護士は、その時学校を出たばかりの二十幾つだったが、四つの大逆事件の内この事件は、何の証拠もなく、同志に依頼したという爆弾すら、上海からどうして運べるのか見当もつかないものだった。当然無罪であるはずなのに、朴烈もふみ子も死を急いだのだった。弁護のしようもなく、若い私はついに、そんなに死にたかったら死刑にしたら良いと言った位だと語り、森良弁護士も、若い二人は権力に反逆しながら愛に殉じようとしたように見えると語った。

瀬戸内さんは話した。朝鮮に分骨されたふみ子の墓に、当時の同志の一人陸さんに案内してもらったとき陸さんが大きな土饅頭の墓に身を投げかけて号泣した。陸さんは朴烈の家の者が墓地の方向に足を向けるとすぐ警官が二人ついてくるような仕末で、ついにその土地にも居られなくなったと語ったという。

当時の同志の一人だった韓君は、朝鮮の新聞に、瀬戸内晴美や松本清張が行ったのは、ふみ子の遺骨を日本に持ち帰る運動をするためだったという東京通信が出て、

ショックをあたえているが、この通信員が今日本に居らず、確かめようもないと語った。

当時の村長は、村の人たちが冷たい態度を示した様子はなかったが、天皇中心主義の当時の世情で、大逆犯人の血につながる者として、金子一家の人々は、みずから肩身せまく生きねばならなかったと語る。

その時から五十年。その家にふみ子は帰った。家族の一員として改めて迎え入れられた。そして毎年お盆になれば先祖の一人としてこの家に帰ってくるのだ。社会は生者だけのものではない。死者もそこに座を持っている。長い伝統を受け継ぎ受けついで、ひとつの構造としてつくり上げられた地域社会・コミュニティの中に、ひとつの座をもったのだ。それがふみ子の意志であろうとなかろうと、それを包みこんで歴史は流れる。石をもて追われるごとく後にした故郷ではあっても、故郷はやはりなつかしい。木石ならぬ人間であって見れば、情は死者にも通うだろう。

死刑を宣告したものの、さすがに気がさしたのか、恩赦で無期徒刑に減刑された。しかし渡された恩赦状を裂きすてて、ふみ子はみずからの命をちぢめた。数え年で二十三才だった。その短かい一生はドン底の苦しみで続だった。すでに朝鮮の叔母の家でも虐待にたえかねて

自殺しようとしたこともあった。

東京に出て新聞売子になったり、夜店を出したり、女中になったり、その間に正則英語学校にも行った。ここでめぐり合った新山初代のもっていた本を通して多くのものを得た。「労働者セイリヨフ」を感激をもって私に読ませたのも初代さんであった。「死の前夜」を貸してくれたのも初代さんであった。ベルグソンだとか、スペンサーだとかヘーゲルだとかの思想の一般を、もしくは少くともその名を、知らせてくれたのも初代さんであった。中でも一番多く私の思想を導いたものは、初代さんの持つニヒリスチックな思想家の思想であった。スチルネル・アルツィバーセフ、ニイチェ、そうした人々を知ったのもこの時であった。とその自叙伝に書いている。

そして社会思想に触れたのもこの頃だ。けれど実のところ私は社会主義思想をそのまま受納れることができなかった。社会主義は虐げられた民衆のために社会の改革を求めるというが、彼等のなすところは真に民衆の福祉となり得るかどうかということは疑問である。「民衆のために」と言って社会主義は動乱を起すであろう。民衆は自分たちのために起ってくれた人々とともに起って生死を共にするだろう。そして社会に一つの変革が来たとき、ああその時民衆は果して何を得るであろうか。指導者は

権力を握るであろう。その権力によって新しい世界の秩序を建てるであろう。そして民衆は再びその権力の奴隷とならなければならぬのだ。しからば革命とは何だ。それはただ一つの権力に代えるに他の権力をもってすることに過ぎないではないか。と書いている。

新山初代が、気の合った仲間ばかり集って気の合った生活をする、それが一ばん可能性のある、そして一ばん意義のある生き方だと思う。と言うのに対して、私たちは自身には私たち自身の真の仕事というものが有り得ると思う。それが成就しようとしまいと私たちの関したことはではない。私たちはただこれが真の仕事だと思うことをすればよい。そういう仕事をするのが真の生活である。と考えている。

この考え方は僕自身が考えて来たことだが二十三才かそこらの若さでは、僕は考えることのできなかったことだ。僕よりもはるかにすぐれた頭の持主である。そしてまた「死」について、初代の考え方に反対して、私は私の体験から、こう断言することが出来るんです。人が死を怖れるのは、自分が永遠にこの地上から去るということとが悲しいんです。言葉をかえて言えば、人は地上のあらゆる現象を平素はなんとも意識してないかも知れないが、実は自分そのものの内容なので、その内容を失っ

てしまうことが悲しいんです。睡眠は決してその内容を失ってはいません。睡眠はただ忘れていくだけのことで、す。と言っている。

その内容を持ち続けようとする、そしてそれを後から来る者たちに与えようとすることは、人間にとって本能的なこと、前に新山初代が言った、気の合った者同志でつくるコミューンもこの周辺に形成されるものである。こうした本能的なものの方向を変えるもの、人間に危機をもたらしものとして、愛情がある。恋愛はその激情である。そして抑圧に対する憎悪がある。権力への反逆はその至高のものである。民衆の生活の中に入って行くこうした危機を免れねばならないために、さまざまな通過儀礼が行われている。成年式、結婚式、葬式と庶民がつくる共同体はいつでも、その願を形式に托する。考え方によって形式に差もでき、伝えられる間に意味も内容も、形式も変化して、こうした伝統が抑圧的にもなる。政治権力ともなる。みずからを反逆の炎となして電光石火の生を生きる若者もでる。別の新しいコミューンを建設しようとする者もある。そのための思想的根拠を求める者もある。ふみ子の位牌の前での読経の間に読まれた御文章のように、あしたには紅顔ありて世路に誇れども、ゆうべには白骨となりて郊原に朽つと諦観する宗教人も

と叫ぶのは、同感だが、「体をはって」と言うのは影におびえた形だとしか受取れない。

現実には多様であり、刻々に変化する、若い者は絶えず成長している。あるインディアンに木の名を聞いたと同じ木を昨年と別の名で言った。なぜかと聞くと「昨年と今年と同じだと思ふか」と答えた。遺伝的にも観念的にも多様なものを受け継いでいる僕等は流れてやまぬ時間を生きている。これを知ることこそアナリズムの第一歩ではないか。地上に純正なものはない。観念が純正なものを考えることができるばかりに誤信して信仰的態度にも出る。客観的に見ようとしながらも主観に振り回され、中途半端でありながら他を批判しもある。こうした中でわれわれは成長し、相寄り相助けて生きようとする。僕がみずからかえりみて雑種アナリストと言ひのこのためだ。前述インディアンと共に成長を認識するから、影におびえるなど言うのだ。良いと思うものは継続してくれ。そしてイオムもどうか続けてくれ。神戸市葺合区上筒井通8丁目22-6前田幸長方、イオムの会、一部一〇〇円（リベルテールの会でも取次ぎます）

（三浦）

X

向井孝君から

あれば、心頭を滅却すれば火もまた涼しと真理を把持する禪者もいる。深く深く個をつきつめて行つて、そこに見出すものは人間、社会に生きる人間である。宗教をつきつめて行つたデュルクームが見出したことは、神とは社会だということである。

おしゃべりをしすぎたようだ。ふみ子が獄中でつくった歌でこの稿を結ぶとしよう。

うつむきて股の下よりひとを見ぬ

世の有様を さか（倒）に見たくて

（三浦）

X

イオム 第一号、一九七三年三月

関西の諸君が協力してA532ページのイオムを出した。僕たちの世代に続く戦後の第一の世代である。早くからこうしたものが望まれたのだが、やっと出た。皆それぞれに成長し、次の世代に残すべきものを十分に積重ねている。向井君の大逆事件東上記で見られる「大逆事件を私物化するアナキストを許すな」とか「体をはってでもたたかわねばならない」とか書いているのは、すこし大げさだ。「大逆事件の真相をあきらかにする会」に僕は出たことはないが、少くともそのニュースはなかなか良いものだ。当然あって良いものだ。「私物化を許すな」

イオムの紹介とともに向井君の「東上記」について書いたが、その前に向井君にも直接手紙を出したのだった。それについての返事が来たので、ここに追記する。

向井君は大逆事件の真相をあきらかにする会で、問題を起したのは誰とも知らずに書いているようで、「ただいつの時も、又新しくそのような考えの人が出ないとも限らぬでしょう。そういう意味で個人何某の問題でなくアナキスト陣営内の、ある体質として、それをつねに考えていかねばなりません。それには些少のことだからとて、それを見のがして傍観したり、放置することを、まず我々全体の問題にせねばならぬと思います。つまり同じ仲間である以上、それに対して、その非アナキストチックな考えと行為を指摘し、やめさせることこそ、同志としての立場であろうと思います。その意味で、アナ陣営内の内ゲバや、ナワバリあらそいを断じて介入させぬために、とくに当事者でなく、若干、年をとったわれわれが体をはってでもやめさすという泥をかぶる必要があります。その意味であれを覚えて書いたのです。「体をはって」ということばの大げさは、良識ぶってそれを見のがす傾向えの反語という意味として、おくみとり頂ければと思います・・・」と書いている。イオムを見た人たちもこれを合わせて読んでもらえば、向井君の考え

方が分るだろう。(三浦)

× B d R 県におけるアナルシスト出版活動(一八八〇—九一四)

マルセイユのピアンコ君の研究発表である。論文指導 P・ギラル、大学年度(年報?)一九七一—一九七二とあるから卒業論文かと思われるのだが、縦 30 cm × 横 21 cm の片面タイプオフで二三七ページ、出版物の写真や統計を多数挿入(前記ページ数以外)したもので厚さも 3 cm になっている。ウッドコックの本などで名前だけ知っていたものなどの写真もあり、アナルシズムが単に工場労働者の間だけに起ったものでなく、農民を含めた民衆の反逆として、マルセイユ、アルル、ニーム・アヴィニョンなどを含めたロアルド県に深く根を下したものであることが知られる。著者のピアンコ君はアナルシスト連盟やスイスの O I R A の活動に協力する外に自分でのアナルシズムの宣伝、国際協力を行って来た。その多忙な活動の間に、こうした研究をまとめたのだ。ピアンコ君には尾関君も会ったと言っていたが、アナルシズムの運動はやはりこのように根強く推進されねばならない。

(三浦)

×

平安と同志との深い連帯の達成を祈る。(三浦)

×

大平智円君から

「四月に入って、結局リベルテールの会にも、また近代学校にも参加できずじまいで終り、田舎に帰ってくる事態になりました。いろいろ今後のことについても話合いたいことがありましたが私の不意から、その機会を失った事を残念に思っています。・・・リベルテールの皆さんにも、この事について宜敷くお伝え下さい。・・・今後の接触をお願ひ上げます。私の一つの目的である自我思想と自由思想との関連を私なりの視点で今後とも勉強してゆきたいし、その点で私たちの地平は開かれていと思っています」。

×

海燕書房開店

古い同志相沢尚夫君は、アナキズム関係の出版社、海燕書房を開いた。風雨をしのいで発展されることを祈る。(三浦)

×

でいらほん通信、第 16 号から無断転載

僕はこの五月十五日で在島二周年を迎えるが、青ヶ島のむかしのことを調べていると、現代に属することでも、

4・22 名古屋市長選をボイコットし、議会制民主主義の幻想を爆破せよ!

名古屋の伊東章好君からこのステッカーを送って来た。その最後の所で、伊東君は呼びかけている。

すべての市民、労働者、学生の皆さん。私達は支配・被支配関係の容認を意味し、私達に対する支配の道具と化しているブルジョア議会制を粉碎し、自分を代表するものは自分でしかない、自らの力でもってしか真の解放はあり得ないことを、はっきりと確認しつつ、全ての地域・職場・学校で反選挙の闘いの火の手を上げようではありませんか。(三浦)

×

前田幸長、平山房子両同志の渡欧

平山房子は六月十七日、私は七月十七日東京発にて、七月 21 日 22 日、フランスのシャトー・デュ・ロワールで開かれるアナキスト・インタールの集会に出席のためパリへ向います。私たちはアナキスト・インタールに努力したいと願っております。しかし御承知のように彼地にはアナ連と反アナ連の反目があり、そのことについて、私は自分の眼で確かめたいと思っております。・・・私はフランスとイタリアの全土をめぐって同志との連帯を深めたいと思います」。と前田君からの通信である。一路

日常生活にかかわる出来事は、そのはっきりとした年代をつまびらかにせぬことが多い、ということに気がついた。たとえば、プロバンガスがそうだ。

僕は青ヶ島に渡るまでプロバン関係の業界紙にいたので、プロバンガスが何時頃入ったか、を知りたくおもう、幾人かの村人にきいて見ると、「はっきりしたことはしよくないが、たしか二、三年前のことだとおもう」との返答が得られた。そして今日、同じ質問をぶつつけると、以前と同じような答が返ってくるのである。僕はここに青ヶ島の常民の生活の一端をうかがい知るのだが、ここで思うことはプロバンに駆逐された木炭のことである。

もちろん今日でも、炭焼きは完全に廃れたのではなく青年団員の菊池伴夫君が役場、学校用達の木炭を落札して炭釜から白い煙を出しているが、往時のごとく木炭が島の唯一の現金収入という時代はすでに過ぎ去り、ガス風呂の普及も急速に拡充している現状だ。

では青ヶ島における炭焼きの開始はいつ頃からか。この問題は僕にとっては、スミヨシサマの御来歴を考えるためにも重要な問題であるので、どうしても年代を明確にしておきたいのである。

炭焼きの全国的な振興は明治以後のことであるという一般的知識をもって、例のごとく菊池梅吉翁に伺うと、

